

# 社会心理学における責任判断モデル

膳場 百合子  
(早稲田大学創造理工学部)

キーワード：因果性、役割、バイアス

陪審制の歴史の長いアメリカでは、一般の人々の責任判断の分析が社会心理学の分野に膨大に蓄積されている。裁判員制度の導入で我が国でも、一般の人々の判断が法的な文脈に反映される機会が増え、一般の人々の責任判断の特徴を理解する必要性が高まっている。しかし、人々の責任判断過程を包括的に分析した研究は、日本ではまだ行われていない。唐沢班では、一般の人々の責任概念の理解や、責任判断の特徴を把握するステップとして、多分野（法社会学、哲学、社会心理学）にまたがるメンバーが、互いに各々の専門分野で責任がどのように扱われてきたかを共有する作業を行ってきた。ここでは、特に、社会心理学分野で責任がどのように扱われてきたかについて、報告する。既存のモデル（欧米産のモデル）を概観した上で、日本人の責任判断を今後分析していく上で注意が必要な事項について論じたい。

## 1. 社会心理学における責任判断研究の展開

社会心理学における責任判断研究は、対人認知研究（他者の観察可能な行動から、他者の性格や意図など内面を推測する研究）という分野から派生する形で 1950 年代に始まった。この分野で最初に責任を扱ったハイダー(Heider, 1958)は、人が、ある行為結果を見て行為者にどれだけ責任を帰属するかは、行為結果が行為者の内的な原因(意図など)と外的な環境要因のどちらに影響されていたとみなすかによる、とした。行為者の内的な要因に原因が帰属されるほど行為者に大きな責任が帰属され、環境要因に原因が帰属されるほど行為者は免責される、というハイダーの枠組みは責任判断の最も中心的な論理で、社会心理学の責任判断モデルの多くはこの枠組みに従ったものとなっている。

1960 年代から 70 年代にかけて、実証研究を通

じてハイダーの基本枠組みが検証され、大人も子供も、また西洋人も東洋人も、因果性に基づく責任判断をすることが確認された。それと同時に、責任判断は判断者の動機や信念によってバイアスがかかることが発見された。すなわち、責任判断は、客観的な因果関係だけでなく、判断者の「自己防衛動機」(Shaver, 1970; Walster, 1966)や判断者の「公正世界観（世の中は公正である、という信念）」(Lerner & Miller, 1978)によって影響を受けることが明らかになった。

1980 年代に入るところから、社会心理学の責任判断研究では、責任概念の混乱が問題とされるようになった。責任判断の実証研究が蓄積されるにつれ、一口に「責任」といっても、因果的な意味での責任か、道徳的な意味での責任か、制裁的な意味での責任か、によって判断結果が必ずしも一致しないことが明らかになってきたからである。このころから、責任判断にかかわるさまざまな概念(原因、責任、非難、制裁など)の関係を整理し、それらを包括した理論モデルがいくつか作られるようになってきた。モデルを類似性に基づいて分類すると、以下の 4 つに分類できる。1) 因果性に基づく責任判断モデル (Shaver, 1985; Shultz & Schleifer, 1983; Weiner, 1995)、2) 因果性(何をしたか)と役割(何をすべきだったか)に基づく責任判断モデル(Hamilton, 1978)、3) 機能主義的なモデル(望ましい責任判断結果をもたらすような判断基準の選択や原因帰属が行われる点を重視するモデル) (Lloyd-Bostock, 1983; Tetlock, 2002)、4) 因果性とバイアス(認知・感情・動機)を統合したモデル(Alicke, 2000)。

## 2. 代表的な責任判断モデル

1). 因果性に基づく責任判断モデル 1980 年代から 90 年代にかけて、責任判断過程を理論的に

分析した社会心理学者の多く (Shaver, 1985; Shultz & Schleifer, 1983; Weiner, 1995) は、「結果が行為者の内的要因に帰属されるほど行為者に責任が帰属される」というハイダーの基本枠組みを精緻化した責任判断過程モデルを構築した。これらのモデルは加害行為をした行為者に対する責任判断が行われる際、まず行為者の行為と結果の「因果性」が判断され、因果性があると判断されると次に、行為者に道徳的な「責任」があるかどうか判断され、道徳的な「責任」があるという判断がなされると、次に、「非難や制裁」が判断される、という流れを想定している。そして、この全体的な流れの中で、因果性・責任・非難や制裁、それぞれの大きさの判断は、個別の判断基準に従って判断されるとしている (図1 参照)。

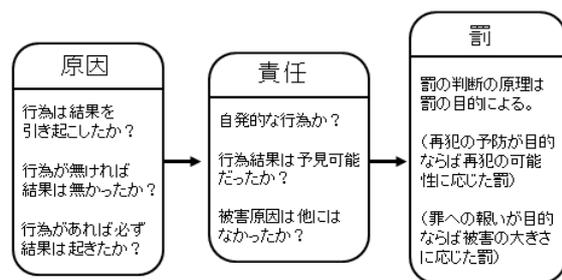


図1 Shultzら (1983)の責任判断過程モデルの要約

**2). 因果性と役割に基づく責任判断モデル** 1) のモデルは、人が個人として行動している場面を主に念頭においたモデルであったが、同じ時期、人が組織の文脈で行動している場面を念頭においた別の系統の研究者は (Hamilton, 1978)、因果性に加え、行為者の役割 (何をすべきだったか) を重視した理論モデルを構築した。このモデルでは、行為者の役割 (行為者に対する社会的な期待: 何をすべきであったか) に照らして、行為者の行為 (因果性: 何をしたか) が評価され、制裁を受ける責任がどれだけあるかが判断される、としている。1) のモデルと違い、2) のモデルは、部下のもたらした悪い結果に対して、因果的に離れた位置にいる上司が監督責任を問われるケースなども説明できるという特徴がある。

**3). 機能主義的なモデル** 1)、2) のモデルはいずれも、他者を責めたり制裁したりする際に人々

が用いる理屈や基準を描いたモデルである。これに対し、それらの理屈や基準を人が、なぜ用いるのか、という側面に焦点をあてたモデルに、機能主義的なモデルがある (Lloyd-Bostock, 1983; Tetlock, 2002)。これらのモデルは、責任判断が一定の社会的結果をもたらす (たとえば厳しい責任追求が高額賠償をもたらしたり、社会的見せしめ効果をもたらしたりなど) 点に注目し、判断者は判断者の望む社会的結果をもたらすような、(判断者にとって) 都合の良い理屈を選択し、責任を判断する、という過程をモデル化している。

**4). 因果性とバイアスを統合したモデル** 3) と同様、ある理屈や基準がなぜ用いられるのか、という側面に注目したモデルに、因果性とバイアスを統合したモデルがある (Alicke, 2000)。このモデルは、因果性の評定や非難の評定が、感情や動機や認知のバイアスを受ける点を重視し、バイアスを生むプロセスを詳しく論じている (たとえば、行為者に対してネガティブな感情を持った判断者は、ささいな逸脱をも非難する厳しい基準を適用したり、行為者の因果的貢献を証明するような証拠ばかり探したり)。

### 3. 日本人の責任判断を今後検討していく上で注意すべき事項

日本人の責任判断も、大枠は上記の西洋のモデルに従うと思われるが、いくつか注意すべき文化的な特徴が考えられる。以下にそれらを論じたい。

- ① 因果性の判断に見られる特徴  
比較文化研究によると、非西洋の人々は物事の原因を考える際、西洋人より、「環境要因の影響」を重視し (Miller & Luthar, 1989)、「因果の連鎖」を重視し (Maddux & Yuki, 2006)、より多くの要因を原因として考慮する (Choi, et al. 2003) ことが知られている。結果を直接招いた個人を因果的な起点とみなさず、種々の背景要因を考慮したより複雑な因果判断をする傾向があるとしたら、こうした特徴が責任判断にもたらす結果に注意する必要があるだろう。行為者個人に責任を集中しないとしたら、行為者をとりまく人々 (上司、同僚、集団全体、社会を構成している消費者や市民、などなど) にどれだけ責任があると考えられるのか、などを十分調べる必要があるだろう。
- ② 因果性以外の判断基準の使用に見られる特徴

複雑な因果認知をする非西洋の人々は、厳密に「因果性」を認定した上での責任判断をすると、非常に時間がかかったり、あるいは、責任追及対象をしばれなくなったりするなどの不都合が生じそうである。複雑な因果認知をする人々がいかにして、素早い責任判断を実現しているのかは謎である。「因果性」以外の別の判断基準を多用しているのか（たとえば Hamilton のモデルにある「役割」という基準など）、また、別の判断プロセスを多く用いているのか（たとえば「因果性」の認定からスタートしない上記3）や4）のモデルのような判断プロセスが多く生じている可能性もある）、などに注意を払う必要があるだろう。

### <引用文献>

- Alicke, M. D. (2000). Culpable control and the psychology of blame. *Psychological Bulletin*, 126, 556-574.
- Choi, I., Dalal, R., Kim-Prieto, C., & Park, H. (2003). Culture and judgement of causal relevance. *Journal of Personality & Social Psychology*, 84, 46-59.
- Hamilton, V. L. (1978). Who is responsible? Toward a social psychology of responsibility attribution. *Social Psychology*, 41, 316-328.
- Heider, F. (1958). *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.
- Lerner, M. J., & Miller, D. T. (1978). Just world research and the attribution process: Looking back and ahead. *Psychological Bulletin*, 85, 1030-1051.
- Lloyd-Bostock, S. (1983). Attributions of cause and responsibility as social phenomena. In J. Jaspars, F. D. Fincham & M. Hewstone (Eds.), *Attribution theory and research: Conceptual, developmental and social dimensions* (pp. 261-289). London: Academic.
- Maddux, W. W., & Yuki, M. (2006). The "Ripple Effect": Cultural Differences in Perceptions of the Consequences of Events. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 32, 669-683.
- Miller, J. G., & Luthar, S. (1989). Issues of interpersonal responsibility and accountability: A comparison of Indians' and Americans' moral judgments. *Social Cognition*, 7, 237-261.
- Shaver, K. G. (1970). Defensive attribution: Effects of severity and relevance on the responsibility assigned for an accident. *Journal of Personality and Social Psychology*, 14, 101-113.
- Shaver, K. G. (1985). *The attribution of blame*. New York: Springer-Verlag.
- Shultz, T. R., & Schleifer, M. (1983). Towards a refinement of attribution concepts. In J. Jaspars, F. D. Fincham & M. Hewstone (Eds.), *Attribution theory and research: Conceptual, developmental and social dimensions* (pp. 37-62). London: Academic.
- Tetlock, P. E. (2002). Social-functionalist metaphors for judgment and choice: The intuitive politician, theologian, and prosecutor. *Psychological Review*, 109, 451-471.
- Walster, E. (1966). Assignment of responsibility for an accident. *Journal of Personality & Social Psychology*, 3, 73-79.
- Weiner, B. (1995). Inferences of responsibility and social motivation. *Advances in Experimental Social Psychology*, 27, 1-47.